平成6年8月9日

区立郷土資料館特集展示

『空襲と学童疎開』展

8月31日まで開催中

日本列島全体が灼熱地獄に包まれた中、今年も終戦記念日がやってくる。豊島区立郷土資料館（西池袋２－３７）では現在、今年も戦争を忘れないための企画として、特集展示『空襲と学童疎開』が開催されている。期間は８月３１日（月曜日と２１日休館）まで。午前９時から午後５時１５分。入場無料。

この特集展示は、今年が集団学童疎開が始まって５０年目の節目に当たっており、空襲を避けるため多くの東京の子供たちが地方に移った学童疎開が日本の戦争を考える上で大変重要な意味を持っていることから開催されているもので、これまでに同館が開催してきた「戦中戦後の区民生活展」や「学童疎開展」での資料に加え、その後の多くの新収蔵資料や新公開資料を交えた約１５０点ほどが「空襲」「防空」「学童疎開」「兵士からの書簡」の４コーナーに分けて展示されている。

「空襲」コーナーでは、Ｂ２９の発電機、排気筒などの落下物、焼夷弾、空襲で焼け炭化した米、溶けた薬びん、被災者の持っていた財布、硬貨などが展示されている。「防空」コーナーでは、防空頭巾、民間用鉄かぶと、国民服、布製バケツなどのほか、防空対処のパンフレットなども展示されている。さらに、「学童疎開」コーナーでは、疎開先で使用した机、黒板、学用品入れ、疎開児童と家族の往復書簡などが、また、「兵士からの書簡」コーナーでは、空襲の直後に家族との音信が途絶えた時、必死に消息を尋ねる様子や「なまじ個性だの主観なんてネェ方がいいのかも知れねえ」と軍隊生活に対する疑問を綴った手紙（はがき）、検閲のためか一部の文章が消されている手紙、戦時中購入を強いられたがその後のインフレで反故同然になってしまった戦時国債の購入を奨励する「一億が債券買って總進軍」などと書かれたポスター、五銭硬貨を縫い付けて「死線を越える」と縁起をかついだ胴巻などが展示されている。いずれも戦争の狂気、滑稽さ、悲惨さを物語る展示品である。

豊島区が受けた最大規模の空襲は、昭和２０年４月１３日の第２回目の「東京大空襲」の時だった。この時アメリカが攻撃目標としたのは、王子を中心とする約２６平方kmの旧日本陸軍兵器廠複合体だったこともあり、同区が最大の被害地区になっている。被害は、死者約６百人、重軽傷者約２千４百人、焼失家屋約５万３千戸、罹災者約１６万１千人にのぼり、当時の同区内の人口約２３万人の約７０％が罹災している。

豊島区立郷土資料館は、池袋駅西口下車徒歩７分、豊島区立勤労福祉会館７階。

問合せ　郷土資料館